

齋藤 日出於（さいとう・ひでお）

1、プロフィール

俳人。高校教諭。昭和 33 年頃から句作を始める。闘病に苦しみながら、句誌「草苑」などで活躍し、49 年6月「渋柿(のち渋柿園)」を創刊し主宰した。

<生没>

1923(大正 12)年2月5日～1980(昭和 55)年2月 28 日

<代表作>

齋藤日出於遺句集『夕椿』

勝鶏のまだ眼の陰し夕椿 草笛のための一葉えらびとり

<青森との関わり>

弘前市出身。弘前高等学校、弘前工業高等学校教諭。職場で句会活動を始め句作と俳句普及に努めた。

2、作家解説

大正 12 年2月5日、弘前市袋町 59 番地に生まれる。本名、旭夫(ひでを)。弘前市立城西小学校を経て昭和 10 年4月、弘前中学校へ入学。15 年3月卒業。16 年4月、盛岡高等工業学校入学。18 年9月、戦時による繰上げ卒業で日立航空機会社入社。10 月から 20 年9月まで旧海軍の軍務に服した。

戦後 22 年4月、弘前市立第二中学校教諭。24 年4月東京理科大学二部数学科第三学年に編入。26 年3月卒業。4月弘前高等学校教諭となる。33 年5月、弘高句会を開催し、句会幹事となる。35 年 10 月鏡陵句会と呼称する。

37 年頃より、心房細動の症候を感じ、以後生涯を通じて心房細動に起因する血栓症などを患い、弘前大学病院、小野病院に断続して入退院する。44 年1月「夏草」、4月「十和田」に入会。10 月、増田手古奈の勧めで、俳号を「日出於」と改める。雑誌「俳句」雑詠に投句を始めた。45 年4月「草苑」、続いて「蘭」に入会。

48年4月、弘前工業高等学校に転任。ここでも職場句会に努める。49年6月、「渋柿」を創刊し、安田汀四郎を選者にむかえる。53年1月、「渋柿」を「渋柿園」に改題。7月、5周年記念号を発行。8月、東奥日報社主催、県俳句大会で第一席となる。

55年1月、身体不調を訴え、2月心不全症状のため臥床し、28日小野病院に入院。29日朝、心筋梗塞のため急逝した。享年57。「渋柿園」4月号が追悼号を編む。

56年1月、『斎藤日出於遺句集 夕椿』を刊行委員会が発刊する。

3、資料紹介

○『斎藤日出於遺句集 夕椿』

図書

1981(昭和56)年1月20日

作者の死後、「渋柿園」同人を中心とする刊行委員会によって編集・発行された。句帳に記されていた約4000句から536句を所収。集名は「勝鶏のまだ眼の陰し夕椿」から採られた。「草苑」主宰、桂信子が序文を寄せている。